

# 全科協 *News*

vol.56

NO.2

CONTENTS

- P2 特集
- P10 3月4月の特別展等
- P12 リニューアル情報
- P14 海外博物館事情
- P16 トピックス

| 特集 | Special |

## 生徒や学生の活躍できる博物館



表紙の写真の解説は、P16の「我が館の推しなモノ・コト」をご覧ください

**JCSM**  
Japanese Council of Science Museums Newsletter

全国科学博物館協議会

〒110-8718  
東京都台東区上野公園7-20 国立科学博物館内  
TEL 03-5814-9171  
<https://jcsm.jp/>

# 生徒や学生の活躍できる博物館

博物館と学校の間関係とはどのようなものだろう。多くの方がイメージするものとしては、団体での館内見学や出前授業、あるいは職場体験や館園実習といったものかもしれない。これらはいずれも博物館が「提供する」側、学校が「提供される」側といった関係の上に成り立つものである。

しかし、近年の学校教育における「総合的な学習の時間」や探究活動、地域貢献活動の高まりなどを背景として、生徒や学生と博物館の関係性は、これまでの「来館者」と「提供者」という受動的なものから、「共創者」としての能動的な関係へと移りつつある。その結果、全国の博物館では、例えば高校生による調査研究に基づいた企画展示の実施や、大学生による教育普及プログラムの企画・運営など、従来の教育普及活動の枠にとどまらない、さまざまな若者の活躍の場が生まれている。

これらの活動は、生徒や学生にとって実践的な学びの機会となるだけでなく、館側にとっても、既存の概念に縛られない若者ならではの自由で斬新な視点を取り込むことで、社会の多様化するニーズへの応答や、地域社会との連携強化といったいくつものメリットをもたらしてくれる。また、何より少子高齢化が叫ばれて久しい日本にあっては、将来を担う世代に博物館の活動に主体的に加わってもらうことは、これからの地域社会に真に必要とされる博物館であり続けるために必要不可欠なことと言っても過言ではないだろう。

本特集では、4館における生徒や学生を中心に博物館と共同で行った事業や取り組みについて紹介していただく。また、これらの試みがどのようにして行われる運びとなったのか、事業実施後の展開なども併せて紹介していただくことで、本特集が全国でこれからの世代を担う生徒や学生の活躍できる博物館をさらに増やしていくことの一助となれば幸いである。

岩手県立博物館 専門学芸員 望月 貴史

きしわだ自然資料館 学芸員(特命参事) 平田 慎一郎

## 主体的な学生とともに創る科学博物館の未来

— 東京農工大学科学博物館支援団体mussetの活動とその広がり —

東京農工大学科学博物館

齊藤 有里加

### 1. はじめに

科学館や自然史系博物館の現場では、子どもや家族連れに対するプログラムは多様な一方、中高生や大学生への展開は少なく「若い世代にどう関わるか」という課題は、多くの館が共有するテーマである。この課題は、2025年 ICOM ドバイ大会の三委員会合同セッション(CIMUSET・NATHIST・CECA)においても、若年成人(16~25歳)は博物館に最も到達しにくい一方、価値観や世界観を形成する重要な世代であると指摘され、科学館が若者の主体的な学びを支える協働の場となる必要性が示されている<sup>1</sup>。こうした国際的潮流は、国内の学生協働の動きとも重なる。若者の視点や企画力、デジタルスキルは、社会課題と向き合う博物館を推進する上で、新たな価値創造につながる可能性を持つ。一方、大学生世代は授業や研究、アルバイトなど日々の活動が細分化されており、学内外の文化施設に「足を運ぶ時間的余裕」が生まれにくいことも、博物館との接点が少ない背景ともいえる。また、大学キャンパス内に博物館が存在していても、その利用経験がない学生も存在する。本稿では、東京農工大学科学博物館の学生支援団体musset(ミュゼット)の活動を中心に、若者と科学博物館の協働がどのように成立し、どのような価値と課題が見えてきたのかを整理する。

### 2. musset とは何か:

#### 学生が主体となる科学博物館との協働組織

東京農工大学科学博物館では、以前より友の会や研究会が支援活動を行い、学芸員実習生も館内での実習を担ってきた。そうした中、2012年、来館した学生が「学内で博物館の存在が十分に知られていない」現状に気づき、任意の学生支援組織としてmusset(みゆぜっと)(Museum Student Support Team)を結成した<sup>2</sup>。学芸員実習とは異なり、学生が自ら参加を希望する点に特徴がある。現在は70名余りが所属し20名程度がコアメンバーとして活動している。展示改善、資料整理、サイエンスコミュニケーション企画、イベント補助、SNS発信など多様な活動を展開している。特に、理系学生の専門性を活かしたサイエンスコミュニケーション活動は学生自身が研究者として必要な専門知識を一般に伝える感覚を身につけるトレーニングの場となるとともに、大学の研究と地域をつなぐ科学館ならではの協働として位置づけられる。例えば、当館が所蔵する養蚕・製糸資料を活かしたサイエンスコミュニケーション活動を継続しており、2015年からは江戸東京たてもの園と連携した体験型企画を毎年実施している。絹の視点から繭や絹繊維の観察、顕微鏡を用いた「絹のサイエンス」などのプログラムは学生が企画・運営を担い、地域の歴史文化と大学の専門性を結びつける取り組みとして発展してきた。また、カイコ視点からはメンデルの法則を理解す

るプログラム「カイコで学ぶ！ 遺伝のふしぎ」(写真1)では、蚕学研究室への取材動画を編集し、学内の研究と結びつけるなど、人文科学、自然科学両分野を跨ぐ視点で地域と大学を結びつけようと試みており、学生が軸となることで大学の歴史背景とも連なるユニークな試みを行なっている。このような継続的な活動は、館側では学生を「教えられる側」ではなく、企画段階から関わるパートナーとして扱い、提案があれば学芸員と議論しながら実現に向けて調整を行う文化が生まれている。博物館、学生相互の信頼関係により、学生が主体的に博物館を支えるモデルとして機能しているといえる。



写真1 「カイコで学ぶ！ 遺伝のふしぎ」

### 3. 学生主体セッションに見えた多様な実践 (小さいとこサミット)

2024年に開催された第13回小さいとこサミット in 東京(テーマ:「学生と博物館のステキな関係とは?」)では、学生が主役となるセッションが企画され、全国の学生支援団体がそれぞれの実践を紹介した<sup>3</sup>。登壇したのはmusset(東京農工大学)、ミュゼさぼ(早稲田大学)、みちのく博物楽団(東北大学)、北里大学の学生団体など、多様な館種を支援する学生組織であった(写真2)。展示解説、広報、教育普及、イベント補助など、学生が担う活動の幅広さと、館種や地域性に応じた協働の多様性が共有された。また、学生同士が互いの実践から刺激を受け、今後の連携の可能性を語り合う姿も見られた。mussetはこれを機に活動の振り返り展示を館内で制作し、学生自身による可視化と継承の試みが始まっている(写真3)。



写真2 学生組織同士の意見交流の様子



写真3 mussetによる小さいとこサミット振り返り展示の設営

### 4. 学生協働の価値と課題

学生協働が科学博物館にもたらす価値は大きい。若者の視点は展示改善に新鮮な発想をもたらし、SNSなどのデジタル発信力は館の情報発信を強化する。来館者との対話においても、大学生が担うことで親しみやすさが生まれ、展示理解の促進につながる。

一方、学生自身にとっても、提案が形になる経験、他大学生とのネットワーク形成、現場のリアリティを学ぶ体験は大きな学びとなる。博物館を「訪れる場所」から「関わる場所」へと捉え直す契機になっている。

しかし、活動交流を重ねるなかで課題も共有されつつある。第一に、資料取扱いの線引きである。安全管理と教育的機会をどう両立させるかが問われる。第二に、有償・無償の問題である。無償活動は学生の参加継続の負担となる場合がある一方、有償化が主体的活動に制限を与える場合もあり、制度設計は一様ではない。第三に、世代交代への対応である。学生組織は毎年メンバーが変わるため、引き継ぎと活動の可視化が不可欠となる。第四に、受け入れ体制の整備である。役割の文書化、段階的育成、安全管理の指針など、館側の設計が成果を左右する。

大学は公立・私立や専門分野によって学年暦が大きく異なり、卒業までの時間の使い方も多様である。受け入れ側は短期的な実験的試行を重ねつつ、成功例を制度設計へ取り込める環境で臨む必要がある。また学生が自立型コミュニティを運営するうえではメンターの存在が大きい。他組織やOG・OBとの交流の場を設ける支援は、学生内のマネジメント力向上につながる。

### 5. おわりに：若者とともに創る科学館の未来

サミットは一過性の催しにとどまらず、その後も学生側・受け入れ側の双方に具体的な動きを生んだ。学生組織では、サミットで得た視点を展示企画へと展開する試みが始まり、別の学生団体においても世代交代を経て新体制のもと活動の継続が図られている<sup>4</sup>。こうした「振り返り」や「引き継ぎ」

を伴う実践は、学生が自らの活動の立ち位置を確かめ、意欲と自信を得るための足場となった。

同時に、参加館の側でも学生チームが関わるインターンプログラムの新設など、受け入れ体制を試行する動きが見られた<sup>5</sup>。学生の実践が館の運営に接続し始めたことは、学生協働が単発の企画ではなく、館を支える文化として広がりうることを示している。学生主体の実践は、学生を「担い手」ではなく「協働者」として位置づけるモデルとなり、学生の成長と館の発展を同時に実現する可能性をもつ。

今後の課題は、協働を継続可能にする受け入れの仕組みづくりと制度設計、そして地域を越えて学び合う学生ネットワークの形成である。個別の成功を点で終わらず、経験を共有し、次の館へ手渡していく。その循環を育てながら、若者ととともに科学博物館の未来を更新する取り組みを、より広い現場へと接続していきたい。

## 参考文献

1. International Council of Museums (2025). Session C-3: Science and Natural History Museums and Young Adults. ICOM Dubai 2025. <https://dubai2025.icom.museum/programme> (2025.12.11 確認)
2. musset公式サイト <https://sites.google.com/st.go.tuat.ac.jp/musset-hp> (2025.12.11 確認)
3. 小規模ミュージアムネットワーク・東京農工大学科学博物館 (2024)『第13回小さいとこサミット in 東京 実施報告』。
4. 小さいとこネット関東クラスター「小規模博物館相談室」図書館総合展越境・Openのための逗留地 <https://www.libraryfair.jp/booth/2025/296> (2025.12.11 確認)
5. 八尾市立しおんじやま古墳学習館「歴史体験インターンシップ&歴史体験サポーター」 <https://racco-taiken.com/sionji/archives/news/sionji-internship2025> (2025.12.11 確認)

## 学生団体との協働による標本作製活動

鳥取県立博物館  
一澤 圭

鳥取県立博物館（以下、当館）では、近隣の大学である鳥取大学および公立鳥取環境大学（以下、環境大学）の学生らと共に、脊椎動物の標本化作業を行っている。学生らにとっては野生動物の標本を直接扱う経験を積むことができ、当館にとっても標本の収集促進のみならず、展示や普及活動への活用等、大きな恩恵を受けている。本稿では学生らとこのような活動を行うようになった経緯と、活動による成果等について紹介する。

### 当館の課題：冷凍庫が満杯

当館は自然史、歴史・民俗、美術工芸といった分野を扱う総合博物館であり、各分野に関係する様々な資料を収集・保管している。そのうち脊椎動物標本については、事故等によって偶発的に発生した野生動物遺体を拾得することが主要な収集方法となっている。例えば交通事故死した哺乳類、窓ガラス等に衝突死した鳥類、死亡漂着した魚類やウミガメ類、海獣類等である。拾得した動物遺体は、多くの場合、記録撮影や計測の後に冷凍庫にて保管され、標本化の準備が整い次第、剥製や毛皮標本、骨格標本等に加工される。

野生動物遺体は地域の自然史解明における重要な情報源であり、可能な限り拾得し標本化していきたい、というのが動物担当学芸員の思いである。標本化については、業者委託による本剥製や交通骨格標本等の作製も行っている。しかしこの方法では高額な費用がかかるため、限られた予算の中で処理できる動物遺体は年間で3～4個体程度である。

それ以外は、職員の手作業によって分離骨格標本や仮剥製、なめし毛皮標本等に加工している。当館では1名の動物担当学芸員が、他の職員の協力も得つつ標本化作業を担っているが、そこに割くことのできる人員や時間はごく限られており、結果的に冷凍庫は常に満杯状態となってしまう。これは野生脊椎動物の標本を扱う博物館施設では、多少なりとも同様の課題を抱えていることだろう。

### きっかけ：学生との交流の中で

そのような状況の中、2008年頃に鳥取大学農学部獣医学科（現：共同獣医学科）の学生の一人が当館職員と知り合い、交流する中で当館の冷凍庫が満杯状態である状況を知った。そして当時、学生らにとっては、獣医学科に所属するものの野生動物の遺体に直接接触れる機会がほとんどないという問題があった。

そこで学生らは、自身らが野生動物の解剖等を学ぶ教材として当館冷凍庫にある動物遺体を活用し、解剖後の遺体は骨格標本等に加工して当館に納めることを提案した。学生らにとって実技経験の場となるだけでなく、当館にとっても、標本収集の促進や冷凍庫問題の改善につながる、というものである。このようにして、鳥取大学の学生らと当館職員らによる、動物遺体を標本化していく活動がスタートした。

なお当館内での問題ではあるが、当時は外部の学生が継続的に当館内で作業をする、という前例がなかったため、この活動を当館内でどのように位置づけるか、ということが議論となった。当初は、学生からの研究相談への対応、という扱いとしていたが、その後参加メンバーが増えてきたため、正式な手続きを踏むことにした。

手続きとしては、当該学生らが所属する学生団体（サークル名：バード★ゲッターズ）の顧問である鳥取大学の教官名により当館の標本利用の申請書を提出していただき、当館側から利用許可を出す、という形式をとることにした。学生ら自身による研究活動の一環として、拾得された野生動物遺体から形態や食性等の情報の収集を行うこととし、その材料として当館の冷凍遺体を利用する、というものである。そして2009年度からは毎年、年度ごとの参加メンバー表の提出と共に書類を交わし、活動を行っている。

その後、もう一つの近隣大学である環境大学の学生が数名、この活動に加わるようになった。それらの学生は上記の鳥取大学生との活動について感知していたわけではなく、個人的

に骨格標本等を作っており、詳細な作製方法等について聞きたい、と当館学芸員に問い合わせてきたことがきっかけであった。当初はゲストとして鳥取大学生の活動に加わってもらっていたが、やがて環境大学生の参加メンバーも増えてきたため、2024年からは上記と同様に環境大学の学生団体（サークル名：生物部）との手続きを交わし、現在に至っている。

令和7年度の活動メンバーは、鳥取大学生35名および環境大学生10名が登録され、そこに学生以外のメンバー8名が加わるといった構成である。

### 活動日の設定と作業内容

活動を開始した当初は、当館学芸員と学生側とで活動希望日を提案しあい、日程をすり合わせていた。しかし調整に手間と時間がかかる上、お互いの希望がなかなかかみ合わず、しばらく活動ができない期間が生じてしまう時もあった。そこで現在では、原則として土日祝日等大学の授業が休みになる日の中から、当館側で活動日を設定し、その日に参加できるメンバーが、それぞれ可能な時間帯に来館し作業する、という形式をとっている。それにより月に1～2回のペースで活動を続けることができています。1回の活動日における参加者数は、数名～十数名程度である（写真1）。

作業内容としては、対象となる動物遺体の外部計測、外傷等の確認・記録、剥皮・解剖、標本への加工といった流れである。その中で必要に応じ、外部寄生虫等の確認・採取、消化管内容物の記録・保存、病変部位の確認・記録等も行う。解剖して取り出した骨格は、除肉・洗浄・乾燥を経て、分離骨格標本とする。外皮の状態によって、哺乳類であればなめし皮標本、鳥類であれば仮剥製や羽毛標本等も作製する。



写真1 学生らによる標本作製活動の様子。(A) 小型哺乳類の解剖作業。(B) 作製した分離骨格標本を展示用に整えている様子。

### 活動の成果

この活動は、学生側と当館側の双方に大きなメリットをもたらしていると考えられる。例えば剥皮・解剖作業の際に、

メスの扱い方や切開のコツ等について習熟者が初心者に指導したり、筋肉や骨の名称、消化器官の配置等、大学の授業で教わったことを再確認したりする様子が見られ、学生自身の学習機会の獲得につながっているようである。それに加え、異なる学年・異なる大学間での学生同士、さらに学生とそれ以外の参加者間でのコミュニケーションが行われることにより、学生の社会経験の場となることも期待できる。

そして何より、この活動で当館の標本収集が大幅に促進されたことが大きな成果といえる。これまでに骨格標本、仮剥製、毛皮標本、羽毛標本等、合計で約150点の標本が作製、または作製に着手された。さらに、鯨類やウミガメ類等、大型のため一人では対応しがたい標本も、複数人の活動メンバーで協力しながら対処できていることも重要である。また自然史標本として収蔵庫に保管されるもの（写真2）以外にも、展示資料として活用されているもの（写真3）、羽毛や骨をテーマにした普及講座の材料として活用されたものもある。



写真2 学生らと共に作製し、収蔵庫に保管されている標本。(A) 哺乳類および鳥類の分離骨格標本。(B) 鳥類の仮剥製標本。



写真3 学生らと共に作製し、通常展示室で展示されている標本。(A) ホンドギツネ分離骨格標本（下段）。(B) 鳥類の羽毛標本（手前）。

これらの標本を介して、学生たちの活動が博物館事業の重要な一角を担っているのである。

## おわりに

以上、当館と学生団体とによる標本作製活動の様子を紹介した。この活動の場合は、学生側からの提案や働きかけによって協働関係がスタートしていることが特徴のひとつである。博物館側からの一方的な「押しつけ」になってしまうと、学生の自主性や自由な発想が損なわれ、活動が委縮してしまう恐れもある。学生側と博物館側とが、双方の問題点や制約等を確認しつつ、お互いの要望や発想を自由に提案しあえる関

係を構築していくことが、活発な活動の継続につながるものと考えている。

鳥取大学獣医学科（当時）の伊従留南氏には、本活動を始めるきっかけを作っていただき、活動初期のメンバーとともに本活動の基礎を作り上げていただいた。また各団体の顧問の先生をはじめ大学関係者の方々には、当活動にご理解いただき、支援していただいている。そして、学生諸氏をはじめとする参加メンバーの皆様には、いつも積極的に活動していただき、当館の事業に大きく貢献していただいている。以上の方々に、深く感謝の意を表する。

## 「学び手」から「担い手」へ

### —— 特別支援学校との博学連携がつくる学びのプラットフォーム ——

岩手県立博物館

主任専門学芸員 近藤 良子

## 1. 岩手県立博物館における“博学連携” ～双方が学び合うプラットフォームの構築～

本稿では、当館が特別支援学校との継続的な博学連携で取り組んできた実践を紹介し、「博物館から学校への一方的な支援」ではなく、「双方が学び合うプラットフォーム」と捉え、教育現場と専門機関が協働する意義を示します。ここでの「プラットフォーム」とは、博物館と学校が一方的な支援関係ではなく、資料・専門性・教育実践を共有しながら、継続的に学びを更新していく協働の基盤を指します。

博物館が学校教育との連携を掲げる中、学習利用の大半は小中学生で、利用者層に偏りがあります。特に高・大学生の利用は8.3%にすぎないという現状です（2015～2024年度）。また、提供型の教育普及が中心で、学校との“協働”に課題が残っており、「双方協働の新しいモデルの必要性」を感じていました。

新たな協働型の博学連携が始まる契機となったのが、当館にある体験学習室の整備事業でした。ここは、児童生徒向けのハンズオン（触察）資料をメインにしており、①身につける、②遊ぶ、③ためす・さわる、④読むの4つのコーナーで構成され、身につけるコーナーは他所では着用できない当館独自の衣装が好評です。予算上の問題から衣装製作を外部に依頼する発案がなされ、県内各学校等に製作協力を要請し、家政科学科のある岩手県立平館高等学校との連携が2015年から始まり、9年間継続しました。ここでの成果物は、体験

学習室に配置され活用されています（下表参照）。いずれも館蔵資料を活かし、博物館・学校・地域の人材の協働で製作したものです。

実践から、以下の点を博学連携の指標として整理しました。

- ①博学連携の前提は共同研究であること
- ②博物館が一次資料の宝庫として再定義され活用されること
- ③通年での事業計画で双方向のやり取りがあること
- ④地域企業や人材を事業に組み込むことで学びの深みをもたせること
- ⑤教育成果が評価される設計であること

この連携では、単年度・単発の取り組みにとどまらず、学校と博物館の学びが継続していくための関係性の基盤、いわば「関係のインフラ」を整える役割を果たし、双方が学び合うプラットフォームを構築しました。

## 2. 授業での実践例

### 事例 岩手県立盛岡峰南高等支援学校との博学連携

2023年から新たな博学連携がスタートしました。きっかけは、「教員のための博物館の日」に参加した教員から博物館資料を活用した効果的な学習について相談を受けたことでした。

本事例では、特別支援学校との協働による触察教材開発のプロセスと、その中で重視してきた工夫点について紹介します。

博学連携で製作した体験学習室衣装

製作衣装	製作年度	原資料、モデルと原資料年代	地域の協力人材・企業
鹿鳴館ドレス	2015	岩手県令の妻のドレス（明治中頃）	二宮柊子氏（染色作家）、東亜和裁
女学生装束	2016	県内女学校時代の制服（明治後半から大正初め頃）、紫根染	東亜和裁
あねこ衣装	2017～2018	雫石地方の県指定野良着（昭和）	雫石民芸社・階美榮子氏
水干	2019	教材貸出用装束の簡易版	—
大漁祝着	2020	三陸地方の大漁のバンテン	(株)伊藤染工場
人形芝居衣装	2021	県内人形歌舞伎衣装（昭和）	倉沢人形歌舞伎・東亜和裁
あねこ衣装の帯※	2023～2024	県指定野良着の帯（昭和）	雫石民芸社

※本稿での連携事例

### ①学校側のニーズ

専門教科の一つである生活科学科の縫製デザイン班で行っている裂き織（布を細かく裂いて緯糸を作り、織り込んで新たな布に再生する）技術を活用できないか、特に地域社会とのつながりを持ち、社会に主体的に関わる態度を育成することを目的に、博物館との連携を希望されました。

### ②学芸員で素材候補を検討

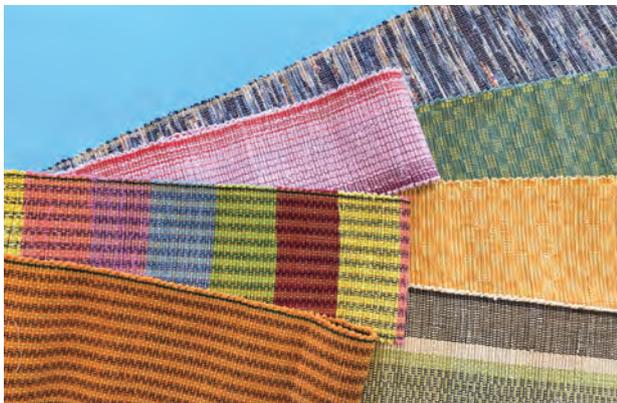
先に他校との博学連携で製作したあねこ衣装の帯は、子どもたちが着用しやすいよう前掛け部分と帯を縫い合わせた一体型のもので、本来のように「裂き織」で製作することとしました。

当館では、岩手県指定有形民俗文化財の「雫石地域の野良着」（中屋弘子収集農民服飾資料）を所蔵しています。この資料を前回の高校との連携で選定（雫石あねこ衣装の製作（2017年度・2018年度））した理由は、県指定資料を参考にしながら製作できること、当館展覧会（第2回企画展「岩手の仕事着」1985年）開催のため仕事着の調査研究が行われその研究成果がまとめられていることなど諸条件がそろったからです。

学芸員は、単に資料を提供する立場ではなく、学習の方向性をともに考える伴走者という位置づけで関わりました。

### ③体験着用に適した帯の工夫

資料の説明や野良着の役割等について学芸員が生徒たちにレクチャーし、県指定実物資料を収蔵庫で見学することで資料理解を深めてもらいました。



完成した裂き織の帯



「裂き織」製作の様子

これまで生徒たちが製作してきた裂き織製品は、文化祭で販売することを目的にしていたのですが、博物館に設置する触察資料になるということで、織り方にもこだわってもらい、見た目の美しさ、耳の部分の丁寧な処理、隙なく織りを固めに打ち込むこと等、本物志向で製作してもらいました。

### ④生徒の反応に基づく改善

生徒からは、利用者層を意識した色の工夫や体験学習室の整備について提案が出されました。着用サイズの明記、遊具の遊び方紹介、英語表記、ポップ作り等のアイデアを取り入れることにしました。

## 3. 成果・課題・今後の展望

連携に携わった教員のインタビューから博学連携の成果を生徒の学習効果という観点からまとめると、専門教科の技術力の向上、地域文化財の理解の深化、資料について知識を得、改善を図っていく過程で得たコミュニケーション能力の向上、文化祭などで発表し発信する力等、体験を通じた学びを得られた点に大きな意義がありました。

教員が最も評価したのは、通年での連携が生徒一人ひとりの成長に継続的に寄与したという点でした。その成果は、自己肯定感や主体性、責任感、創造力、思考力の向上となって表れ、学習への向き合い方や他者との関わり方にも変化が見られたことから、生徒の顔を思い浮かべながら、その学習効果の高さを評価していただきました。

また、教員側から考える博学連携のメリットは、以下の意見にヒントがあると考えています。

「これまで生徒の技術と地域をつなげたかったが、入り口が見つかりませんでした。そんな時に博物館は生徒と地域をつなげるワンクッションとなる最適な場であると思いました。生徒が県指定の実物資料を確認しながら製作にあたることでできたことも博物館との連携がなければなし得なかったことです。」

そして連携終盤、生徒たちが最も博物館に期待したことは、自分たちが製作した帯が、どれくらいの来館者の手に取られ、どのように使われているかという点でした。このフィードバックにより、生徒は博物館の「学び手」から地域文化を支える「担い手」へと立場を移すこととなり、自分と地域と文化財がつながる体験となり、生徒たちがこの連携で「自分が誇らしかつ



出来上がった帯で着用体験

た」という感想につながっていると確信しています。

同校は、校外学習前提でのカリキュラムのため年間指導計画に校外学習を設定しやすい状況でしたが、博物館までの移動に時間を要し、活動時間の制約があった点が課題となりました。

また、教員の深い思いの中に、生徒たちが卒業した後も博物館を自分にとっての居場所の一つだと感じられるかどうかまだ工夫があるのかもしれないという感想がこれからさらに一歩進めた博学連携を考える上で大きなヒントになると考えています。

## まとめ

今回の連携では、当館所蔵の資料が活用され、専門的な調査研究成果が役立てられました。

製作してもらった衣装は地域独自の歴史や文化に培われた

伝統的な資料を再現したものであり、また教育普及の観点から脱ぎ着しやすく、着用してみたくなる工夫を主体的に考えてもらい縫製の工程や展示に取り入れました。体験学習室のハンズオン教材に限らず、これらの成果物は館内イベントや出前講座で使用する等、活用の幅も広がっています。

本事例では、双方のスケジュールを踏まえた計画立案に加え、製作や見学のみで完結させない学びを実現するため、状況に応じた軌道修正を重ねながら取り組むこととなりました。その過程において、生徒の実情に即して何が求められているのかを、博物館と学校が相互に確認し合う姿勢が実践の質を支えていました。多様な学びの在り方に向き合う特別支援学校との連携により、博物館は学びを支える場であると同時に、人と文化をつなぐ拠点となり得ることを確信しました。

## 中学生ワークショップに見る生徒が活躍する 山形県立博物館

山形県立博物館  
研究調査専門員 山口 真  
学芸員 瀬戸 大暉

### 山形県立博物館の教育普及

山形県立博物館では、年間約60校程度の学校団体の見学を受け入れています。多くは県内の小学校であり、県立総合博物館として幅広い学校のニーズに応えています。この他に、山形県高等学校文化連盟を通じて、県内高校生を対象とした高校生学芸員一日体験講座を主催しており、例年人文と自然の2日間、令和6年からは総合を加えた3日間で開催し、40名程度を受け入れています。

山形県立博物館は開館から54年が経ち、現在、移転整備に向けた基本構想策定が進められています。これについて、構想段階から県民の皆さんに興味関心を持ってもらうことが求められており、これまでも有識者会議や県民を含めた検討会などが開催され、新設に向けた様々な意見集約のアプローチがとられています。これらの企画の中で、いわゆる未成年の教育年齢層の間である「中学生」の意見を聞くことを目的にワークショップが実施されました。県立中学校2校（山形県立東桜学館中学校、山形県立致道館中学校）の生徒を対象とし、計14人の希望者が参加しました。実施に当たっては①プレワークショップ、②ワークショップ（当日）の2部構成としました。①プレワークショップでは、移転整備を担当する知事部局の職員や学芸員等が各学校を訪問し、ワークショップの趣旨を説明するとともに、導入学習を実施することを目的として、博物館の役割や存在意義についての説明、博物館学芸員による実物の冬虫夏草を用いた講座などを行いました。②ワークショップは博物館に参集して行い、実物の紅花を触り、紅花から作られた紅を唇や手に塗る等の体験活動と、学芸員の解説のもと館内の展示及び収蔵庫見学を実施しました。その後、2グループに分かれ、見学や体験を踏まえて、現在の山形県立博物館に対して感じたことを「喜難哀楽」に分けて発表し、新しい山形県立博物館に対して期待することを「展示」「施設（建物）」「体験」「サービスや工夫」の4項目に分けて書き出し発表しました。

### 博物館としてのかかわり

ワークショップ企画の初期段階では、基本的に子どもたちの意見を聞き取ることが目的となっていました。これに対して、博物館側の現場の意見として「義務教育年齢の子どもの意見は重要だが、単純に新博物館への希望を話し合ったり聞き取ったりでは、現実的な意見にはなりにくい」という点が懸念されていました。これは中学生という年代が博物館への来館経験が乏しいために、博物館（特に山形県立博物館）についての基本的な知識が不足しており、そのような状態で単純に「新しい博物館」を起想させればアミューズメント施設の延長と捉えられてしまうと考えたためです。この点を踏まえ、ワークショップとして新館構想への希望だけを主眼とせず、博物館全体への理解と興味を高め、「博物館ラバーズを育成する」という観点も取り入れたワークショップを構成しました。特に山形県立博物館がこだわる「複製ではなく本物を展示する」という点を強調し、アミューズメント施設にはない「実物に触れ、実感を伴った体験」を設定し、来館者へ驚きを与えられるような内容としました。

### 中学生から得られた意見

ヤマガタダイカイギュウや鉱石、数多くの動物標本等の実物資料への強い関心が示されました。中学生からは、実物の迫力があって、見ていて楽しいと言う意見が聞かれました。一方で、「触る」「匂い」「音」など五感を使って理解する体験の要望が多数挙がりました。これは、当館が従来型の「見る中心の展示」となっていることが要因となり、体験型展示やデジタル技術を活かした多感覚体験に対する要望であると思われます。

今回のワークショップでは、中学生が学芸員と交流する場面も多く、そのことから博物館職員や他の来館者が交流を行い、その中で学びを深め、考えを分かち合うことを望む傾向があることがうかがえました。これは博物館が積極的に交流

を創出する場を設けることで、博物館の中で主体的に学び、時には互いに学び合う、他の場所にはない学習体験を得ることに繋がる可能性があることを示しています。また、普段触れることがない収蔵資料の見学や実物資料と触れ合うワークショップを通して、資料への興味関心が喚起され、さらに理解を深めたいと要望する声が聞かれました。新博物館においても歴史や文化への探究心をかきたてられる体験学習を実施することで、中学生でも楽しみながら山形への理解と愛着を深めることが可能と考えられます。

その他、中学生らしい発想としてグッズの製作、マスコットキャラクターによる音声案内等、新博物館ならではのオリジナルのモノや体験を求める回答が見られました。これらは新博物館への愛着や共感を醸成し、魅力を伝えるブランディングの一環として、グッズやマスコットキャラクターは有効な手段であることが示されたと思われます。また、「博物館らしい」フォトスポットの設置など、博物館に足を運んだ思い出と共に記憶に残る体験を求める回答が挙がりました。今後の博物館にとっても、従来の博物館活動の枠に捉われず、多様な利用者に興味関心を抱かれる戦略をもった広報活動が重要という示唆が得られたワークショップとなりました。

### ワークショップから見る中学生が見た博物館

今回のワークショップは、県内中学生を対象に新博物館への期待や意見を聞き、若い世代の感性や発想を新博物館の基本構想に反映することを目的として実施した企画です。参加した中学生は、展示・学び・交流・広報など多様な観点から率直な意見を寄せており、そこから新博物館に対する関心の高さと、次代を担う世代の価値観が浮かびあがってきました。以下に、ワークショップで得られた主な知見と今後の博物館活動の方向性への示唆をまとめます。

#### (1) 山形の魅力を主体的に感じ、学び・誇りを育む体験の場の創出

ワークショップでは、ヤマガタダイカイギュウ化石や国宝土偶「縄文女神」など実物資料への強い関心が示され、実際に「見て・触れて・感じる」体験を通じて理解を深めたいという声が多く寄せられました。また、紅花体験や企画展〈令和7年度プライム企画展「さくらんぼ〜山形県民、挑戦の結実〜」〉に対しても好意的な意見が多く、県の自然や文化に親しみを感じる姿が見られました。これらは、若い世代にとっても地域の歴史や文化、自然が自らの関心や誇りに直結し、博物館が地元に興味関心を持つきっかけを提供している可能性を示唆しています。

#### (2) 博物館ならではの学びと交流による郷土愛の形成

学芸員による解説や収蔵庫見学が印象に残ったとの声が多く寄せられ、専門的な知識や研究の現場に触れる体験が中学生にとって新鮮な刺激となっていたと思われます。こうした交流は、博物館が単に知識を伝える場ではなく、「人と人、人と地域がつながる学びの場」として機能する可能性を示しています。新博物館では、職員や地域の人々との対話、来館者同士の共有を促す仕組みを整え、誰もが主体的に学びを深め、互いに刺激し合える環境をつくることが重要であり、特に未成年の教育年齢層にとって重要であると考えられます。

#### (3) 来館を促す魅力的な広報と滞在体験の拡充

博物館オリジナルのグッズやマスコットキャラクター、

フォトスポット、ナイトミュージアムなどに関する意見が多く、来館を「特別な体験」として楽しみたいという傾向が顕著に聞かれました。また、県立博物館ならではのカフェやショップなど附帯施設の整備を望む声も多かったです。これらは、幅広い世代が誰でも来れるような博物館を望んでいることを示唆していると思われます。また、「わくわく」を喚起する展示から、心地よく滞在できる環境とサービス、自らの体験を魅力的な形で記録し発信する行為までを一体的に楽しめる空間が、現在は求められていることが明らかになりました。



Giving Shape to Ideas

## DYNAVISION-LED

LED DOME SYSTEM

革新的なテクノロジーを結集した  
新しいLED映像システムで  
リアルな臨場感と美しい映像体験を

ユニカムプラネタリウム 製品 検索

## 3月4月の特別展等

開催館	展覧会名	開催期間
あすなろ会こども遊学館 (釧路市こども遊学館)	春休みイベント2026	3月25日～4月7日
岩手県立博物館	トピック展「緊急企画!ツキノワグマってどんな動物?」	2025年11月7日～3月29日
	テーマ展「石を愉しむ展覧会」	1月10日～3月8日
	トピック展「岩手の川と釣り文化」	2月17日～3月15日
	テーマ展「岩手の絶滅危惧種とネイチャーポジティブ」	3月28日～5月24日
秋田県立博物館	秋田県博50年のあゆみ	1月10日～4月5日
ふくしま森の科学体験センター	第3回 すごいぞ!ふくしま展	2月28日～4月5日
高柳電設工業スペースパーク (郡山市ふれあい科学館)	ホワイエ企画展「太陽からのめぐみ」	2025年12月27日～3月15日
	スペースパーク企画展「ロボットフェスティバル」	3月21日～3月22日
つくばエキスポセンター	企画展「体感!つくばどうぶつランド あそんでまなべる動物園」	3月14日～5月10日
産業技術総合研究所 地質標本館	特別展「空間と波長で広がる地質学:リモートセンシング」	2月25日～6月28日
ミュージアムパーク茨城県 自然博物館	第94回企画展 鳥の世界へようこそ!—知れば 知るほど おもしろい—	2月28日～6月7日
日立シビックセンター科学館 サクリエ	ミニ企画展示「野辺山天文台展～ウラ側まで徹底大公開!～」	1月31日～3月29日
	サクリエ サイエンス フェスティバル	3月14日～3月15日
栃木県立博物館	テーマ展「どーしたもんだろ とちぎの外来生物」	2025年7月19日～4月12日
	テーマ展「ミミズ」	2025年11月15日～5月31日
	テーマ展「昔のこと知ってつけ?～道具を知れば暮らしが見える～」	2025年12月20日～3月29日
	テーマ展「アニマル☆パラダイス Part2～美術の中の動物たち～」	2月21日～4月5日
	企画展「新しくやってきた標本たち～集めて、守って、活かす～」	4月25日～6月15日
群馬県立自然史博物館	第73回企画展「「害虫」たちの大博覧会～見るのはちょっと…?でもね、意外と気になるんです!」	3月20日～5月24日
埼玉県立自然の博物館	トピック展「古秩父湾 国天然記念物指定10年のあゆみ」	1月31日～6月14日
	企画展「植物たちの生き残り術～こうして植物たちは身を守る～」	3月7日～6月14日
千葉市科学館	春・GWの企画展「ようこそ!きぼーる実験室」	3月20日～5月6日
千葉県立中央博物館	生態園トピックス展「生態園のアブラムシ」	2月14日～5月31日
	令和7年度トピックス展「式年神幸祭記念 香取神宮展」	3月14日～5月31日
	令和7年度企画展「生薬～自然からの恵み～」	3月14日～6月15日
港区立みなと科学館	2026春の企画展「いろ あはれなりー科学でひらく日本の色」	3月17日～6月7日
NHK放送博物館	放送100年 音楽・野球・相撲放送ことはじめ	2025年11月1日～3月1日
たばこと塩の博物館	片平孝写真展「塩の旅～地球の塩の現場に立つ～」	1月31日～4月5日
	ひきつけるカタチとコトバー看板・引札にみる明治の商い	4月25日～6月21日
東武博物館	就役から65年 みんなのDRC(デラックスロマンスカー)	2025年10月28日～3月1日

※施設の一部を閉鎖している館園や、入館に際し予約を必要とする館園がございます。各館園のホームページをご確認ください。

開催館	展覧会名	開催期間
多摩六都科学館	春の企画展 石のイロイロ	3月20日～4月5日
神奈川県立生命の星・地球博物館	自然史アーカイブズをひらく	2月21日～5月10日
平塚市博物館	春期特別展「ひらはく50年 市民と歩む地域博物館」	3月20日～5月17日
のとじま水族館	共に生きる生きものたち展	1月10日～4月5日
岐阜県博物館	博物館・歴史資料館 連携企画展「豊臣秀吉と美濃」	2月14日～3月29日
	岐阜県博物館50周年記念特別展「尾張徳川家ゆかりの美濃刀」	4月24日～6月28日
中津川市鉱物博物館	第44回私の展示室「俳句の刻まれた川原の石―『六歌仙塚』の石碑と中津川―」	3月20日～5月31日
ふじのくに地球環境史ミュージアム	サクラ×さくら―山・里・海を彩る「和」の魅惑―	2025年12月6日～5月24日
ディスカバリーパーク焼津天文科学館	冬の特別展「キミはできるか! 神ワザ☆チャレンジ」	2025年12月6日～4月5日
	春の特別展「まわしまくれ!!くるくるランド」	4月18日～6月28日
三重県総合博物館	特別展・第42回企画展「ポケモン化石博物館」	1月17日～4月5日
	第43回企画展「まつりを旅する 受け継いできた三重の宝もの」	4月25日～6月21日
滋賀県立琵琶湖博物館	民俗学者 橋本鉄男がみた近江―滋賀民俗研究のいしずえ―	3月17日～5月24日
高槻市立自然博物館(あくあびあ芥川)	企画展「芥川のええとこ30選」	2月7日～3月8日
	企画展「本からひらく自然～自然と本と博物館～」	3月14日～6月28日
伊丹市昆虫館	企画展 昆虫食～これうまいでえ～	1月24日～4月13日
鳥根県立三瓶自然館	救え!消えゆく生きものたち 2026 ～しまねレッドデータブック 山野の生きもの編～	3月14日～5月24日
人と科学の未来館サイピア(岡山県生涯学習センター)	水槽展示「サイピア春のウナギ祭り―岡山川の川にウナギはEEL―」	2月28日～3月29日
	春季企画展「地球の暗号(プラネット・コード)―ナゾ解き×岩石・鉱物―」	3月1日～5月9日
倉敷市立自然史博物館	特別陳列「たかはしまいまい絵本画展」	2月21日～4月12日
広島市健康づくりセンター健康科学館	からだを旅する血液 赤い液体の秘密	2025年11月8日～3月8日
	食べるを知ろう からだにeat(いーと)も!	3月14日～7月5日
広島市江波山気象館	企画展「科学マジックに挑戦!」	1月24日～3月15日
ヌマジ交通ミュージアム(広島市交通科学館)	春季企画展 なつかしさいっぱい! 収藏品展―航空機・船舶編―	3月6日～5月10日
香川県立五色台少年自然センター	自然科学展示室ミニ企画展 「地域の宝、サンショウウオ展～両生類の「命のつながり」について～」	1月31日～3月22日
佐川地質館	特別展「蛇紋岩と謎に包まれた黒瀬川帯」	2025年5月24日～5月10日
北九州市立自然史・歴史博物館	企画展「調べる・くらべる くらしと道具のうつりかわり」	2025年11月15日～4月19日
	春の特別展「化石のふしぎ展 石になった生き物のヒミツ」	3月20日～5月10日
福岡県青少年科学館	トリック☆トリック アドベンチャー～不思議な世界を大冒険!～	2月28日～4月5日
佐賀県立宇宙科学館	《ゆめざんが》2026春「ビーコロ×ゲーム展」	3月14日～5月10日
熊本県博物館ネットワークセンター	ちょっと昔のくらし探検	1月6日～3月15日
	収藏品展 未来に受け継ぐたからもの	3月24日～8月2日
宮崎県総合博物館	第46回SSP展 自然を楽しむ科学の目	4月25日～6月7日

※次号(5月号)に掲載の5月6月の特別展情報は3月20日(金)までにお寄せください。

# リニューアル情報

※次号(5月号)に掲載のリニューアル情報は3月10日(火)までにお寄せください。

## TEPIA 先端技術館

[更新箇所] TEPIA 先端技術館 1階 ショーケースエリア

[更新内容] TEPIA 先端技術館のショーケースエリアの4つのコーナーのうち1コーナーを「人とAI」へリニューアルします。

今や社会に欠かせない存在となったAIについて、体験を交えながら来館者に理解していただき、AIと人との共創により広がる未来をご覧ください。また、AIのリスクや課題についても知っていただき、最後に一人一人がAIをどのように活用し、どんな未来を作っていきたいかを考えるきっかけとしていただけるような展示構成となっています。

AIの現状、技術的な仕組みや利用等に当たっての課題を子どもたちにも興味を持って理解してもらえるような見せ方の工夫をしています。また、専門家ではないジュニア世代が考案した人とAIによる共創アプリの体験など、他館でも取り組み例の少ない、当館らしさのある展示内容にチャレンジしています。

今回のリニューアルを通じて、人とAIが共創することで生まれる新たな価値、そしてそれにより、これまで解決が困難であった社会課題の解決につながる可能性を伝えたいと考えています。

[公開日] 2026年3月20日

[担当者] 株式会社NHKアート



人とAIコーナー (イメージ)



共創アプリの体験 (イメージ)

**Panasonic**  
CONNECT

空間創造によって  
人々に「喜びと感動」  
を届ける

株式会社 **乃村工藝社**  
東京都港区台場2丁目3番4号 TEL: 03-5962-1171 (代表)

## 岩国市科学センター

[更新箇所] 令和8年4月に供用開始となる「いこいと学びの交流テラス」への移転、全面リニューアル。

[更新内容] 岩国市科学センターは昭和35年（1960）の開館以来、科学教室や科学クラブなどをはじめとした様々な行事等を行い、子どもたちの科学教育を支援する場所として長く親しまれてきました。

これまでの施設は、かつて税務署として建設された建物の一部を使用し、岩石や化石、昆虫などの博物資料のほか、主に小学生を対象にした、手作りの科学おもちゃなどを展示していました。

リニューアル移転後の科学センターは、「福祉・科学学習施設」として建設される「いこいと学びの交流テラス」内に設置され、2倍以上の面積へ拡大します。

常設展示として、光の三原色や大気圧など、理科や科学の原理原則を学べる展示装置「カガクボックス」のほか、太陽系や銀河のスケール感を全身で体感してもらうデジタル体験装置、岩国の自然を生き物や岩石の標本とともに紹介する「岩国ラック」、岩国ラックに展示されたカード情報を読み取ってさらに学びを深める「岩国ビジョン」など、これまでにはなかった展示で、幅広い世代がいつでも科学を楽しみ、学ぶことができるものとなっています。

そのほかにも、移動式プラネタリウムや実験室、工作室等を利用した小・中学校の理科授業など、今後、新施設を利用した様々な科学体験事業を行っていきます。

[公開日] 令和8年4月

[担当業者] 株式会社トータルメディア開発研究所



センター内イメージ



施設外観イメージ図

ここを動かす空間をつくりあげるために。

調査・企画、デザイン・設計、制作・施工、運営

 **Tanseisha**

空間創造のプロフェッショナル **株式会社丹青社**

〒108-8220 東京都港区港南1-2-70 品川シーズンテラス19F  
TEL|03-6455-8100(代表) URL|www.tanseisha.co.jp

札幌・仙台・新潟・名古屋・京都・大阪・福岡・那覇・上海

**TOKYO SCIENCE CO., LTD.**

**ミュージアム・ショップ向/教育用地学標本**



地学標本/化石・鉱物・岩石  
古生物/レプリカ・復元模型  
恐竜復元モデル

◆常設ショールーム：紀伊國屋書店・新宿本店1F TEL\_03(3354)0131(代表)◆

Fossils, Minerals & Rocks

**株式会社 東京サイエンス**

TEL\_03-3350-6725 FAX03-3350-6745  
http://www.tokyo-science.co.jp  
E-mail:info@tokyo-science.co.jp

〒151-0051 渋谷区千駄ヶ谷5-8-2 イワオ・アネックスビル

*Practical Specimens for Study of Earth Science*



## ■ 常設展

### ポルト・アレグレ（ブラジル）の科学博物館で、「科学における女性たち」展がオープン（2025年12月）

2025年12月18日に、ブラジル南部はリオグランデドスル州の州都ポルト・アレグレ（都市圏人口：427万人）の、PUCRS 科学技術博物館で、「科学における女性たち」展がオープンした（PUCRS: リオグランデドスル・カトリック大学）。常設展である同展は、歴史を通して科学技術の発展に貢献してきた女性の功績を称え、その価値を評価し、可視化することを目的としたものだ。科学における女性の主役としての影響力について、人々に深く考えさせ、彼女たちが主導した発見、研究、革新がなければ世界はどのようなものになっていたかを想像してもらえるようになっている。

同展では、イギリスの数学者であり、コンピューター・プログラミングの先駆者とされるエイダ・ラブレス（1815-1852）と、近代看護の創始者とされるフローレンス・ナイチンゲール（1820-1910）をはじめ、Wi-Fi 開発の礎をきづいたオーストリア生まれの発明家ヘディ・ラマー（1914-2000）が紹介されている。またこの展覧会では、カール・ユングの弟子だったブラジルの精神科医ニセ・ダ・シルベイラ（1905-1999）や、ブラジルで最初のCOVID-19 症例が確認されてからわずか48時間で、ウイルスの最初のゲノム配列を特定したチームを率いて世界的な注目を集めたジャクリン・ゴエスといったブラジル科学界の重要人物も紹介されている。また1998年に同館を設立した、リオグランデドスル・カトリック大学所属の科学者も紹介されている。気候変動の研究分野で、空気中の二酸化炭素の回収と変換に研究実績があるサンドラ・アインロフト、神経疾患における神経化学的・薬理的メカニズムに研究実績があるカーラ・ボナン、食道癌、乳癌における放射線治療の研究に実績があるフェルナンダ・モローネ、太陽電池、太陽光モジュールと太陽光発電システム分野に研究実績があるイゼテ・ザネスコや、人間の群衆シミュレーションの開発に実績があるソライア・ムッセなど。館長：Marcus Klein.

Mulheres na Ciência.

Museu de Ciências e Tecnologia da PUCRS. Porto Alegre, Estado do Rio Grande do Sul.

<https://www.pucrs.br/mct/>

<https://portal.pucrs.br/noticias/institucional/exposicao-mulheres-na-ciencia-chega-ao-museu-da-pucrs-e-celebra-protagonismo-feminino-na-construcao-do-conhecimento/>

## ■ リニューアル・移転

### ベオグラード国際空港の航空博物館がリニューアル中（2027年開館予定）

2027年の開館に向けて、セルビアの首都ベオグラード（都市圏人口：170万人）のニコラ・テスラ国際空港に隣接した航空博物館のリニューアル工事が進められている。

同館（1957年設立）は、ニコラ・テスラ国際空港付近で開催される、ベオグラード万博（5月15日～8月15日）にあわせて、開幕前に開館される予定だ。館長：Zoran Radojevic.

Aeronautical Museum, Beograd.

[www.muzejvazduhoplovstva.mod.gov.rs](http://www.muzejvazduhoplovstva.mod.gov.rs)

<https://www.exyuaviation.com/2025/08/new-look-aeronautical-museum-in.html>

### ベオグラード国立自然史博物館が移転（2027年開館予定）

2027年のベオグラード万博前の開館にむけて、ベオグラードの再開発地域「ノヴィ・ベオグラード」で、新しい国立自然史博物館の建設が進められている。

セルビア王国自然科学館（1895年設立）を前身にもつ同館は、バルカン半島各地で収集された標本（約200万点）を所蔵しているが、長くベオグラード市内の数カ所の老朽化した建物で分散されて保管され、常設展示施設はなく、カレメグダン城址公園（ベオグラード要塞）にある展示館のみで展覧会を開催してきた。これらの機能をひとつの建物に集約される新しい施設では、常設展示室のほか、特別展示室と収蔵庫なども備えられることになっている。館長：Slavko Spasić.

Natural History Museum Belgrade. Beograd.

<https://nhmbeo.rs/>

<https://europeanmuseumacademy.eu/how-belgrade-natural-history-museum-survives-without-a-permanent-exhibition/>

### ベオグラードのニコラ・テスラ博物館が移転（2027年開館）

2027年の開館をめざして、ベオグラード市内のニコラ・テスラ博物館が、大々的な再開発を進行中のサヴァ川のウォーターフロント地区に移転して、新たな建物の建設が進められている。

1952年に開館したニコラ・テスラ博物館（建物は、1928年に建てられた政治家の屋敷）は、セルビア系アメリカ人の発明家、電気技師、機械技師。交流電気方式の発明者として知られている、ニコラ・テスラ（1856-1943）の業績を紹介した博物館。現在の施設は延べ面積が250㎡の小さな規模だが、新しい施設の延べ面積は約

6,000㎡になり、ニコラ・テスラの業績が、より多く紹介される予定だ。新しい施設は、歴史的建造物となっている製紙工場の建物に設けられ、内装はザハ・ハディッド建築設計事務所が手がけている。館長：Ivona Jevtić.

Nikola Tesla Museum. Beograd.

<https://www.belgradewaterfront.com/en/amenities/nikola-tesla-museum/>

## ■ 閉館

### 米レオナルド科学博物館が閉館（2025年9月）

2025年9月25日に、ユタ州は州都ソルトレークシティ（都市圏人口：280万人）のレオナルド科学博物館が、15年の歴史に幕を閉じた。コロナ禍による経営難に加え、老朽化した築60年の建物（旧市立図書館）の、エスカレーター、エレベーター、配管など、運営に重要な設備が、建設資材の高騰によって、大規模修繕を断念し、閉館を余儀なくされた。設立と運営は、NPOだった。

The Leonardo. Salt Lake City, Utah.

<https://theleonardo.org/>

### 英モルトンハムステッド自動車博物館が閉館（2024年11月）

2024年11月3日に、デボン州の小さな町モルトンハムステッド（人口：1,500人）の、モルトンハムステッド自動車博物館が、高齢の創設者の引退により閉館した。

同館は、2016年に当時廃屋になっていた路線バスの車庫を使って開館した。開館当時は60台のクラシックカーでスタートしたが、閉館が決定された時点では、150台を超えるクラシックカーとオートバイを有していた。開館継続の意思をもっていた、創設者のフランク・ロフト氏は後継者を探していたが、後継者が見つからなかったため、やむなく館を閉じる決断をした。全所蔵品はオークションにかけられた。

Moretonhampstead Motor Museum.

Moretonhampstead, Devon.

<https://classicsworld.co.uk/news/reprieve-for-moretonhampstead-motor-museum/>

<https://www.youtube.com/watch?v=8RmFh0rAnW8>

## ■ 企画展・特別展

### 独アルトミュールタール恐竜博物館で、「アンモナイトの逸品」展を開催

2024年5月16日に、バーデン＝ヴュルテンベルク州は州都シュトゥットガルト（都市圏人口：550万人）の郊外にある、アルトミュールタール恐竜博物館で、「アンモナイトの逸品」展が開幕した。

展示で紹介された、120点以上のアンモナイト化石は、同館の所蔵品であり、同館の周辺で発見されたものをはじめ、バーデン＝ヴュルテンベルク州のシュヴァーベンジュラ山脈、イギリス、フランス、マダガスカル、モロッ

コ、オーストラリアや、カナダとアメリカ、そして日本で発見されたものだ。種類も大きさもさまざまな、また美しいアンモナイトの化石が一堂に集められている。出品例：メタデロセラス、リトセラス、トロパエム・パウアーバンキ（図参照）など。

同展では、会場の入り口で、無料のクイズ集『Das große Ammoniten-Quiz』が配られており、クイズの全正解者には、食事付きの館内のホールでの無料宿泊と専門家による展示解説等の特典がついた懸賞が用意されている。また同展にあわせて、同館（2016年開館）の設立者である、ライムント・アルバースドルファーとクリスティン・エルドマンの共著による、図録『Ammonite Masterpieces』（Albersdörfer Fossilien GmbH, 2024年刊）が出版された。企画担当：Raimund Albersdörfer, 化石標本作成者：Ronja Sonnenschein, Paul Freitag. 閉幕時期：2026年春。

Ammonite Masterpieces.

Dinosaur Museum Altmühltal. Denkendorf, Baden-Württemberg.

<https://dinosauriermuseum.de/ammonite-masterpieces/>

[https://dinosauriermuseum.de/wp-content/uploads/2025/10/AM\\_Eroeffnung\\_Medienmitteilung.pdf](https://dinosauriermuseum.de/wp-content/uploads/2025/10/AM_Eroeffnung_Medienmitteilung.pdf)

<https://dinosauriermuseum.de/en/mouse-quiz/>

<https://www.ammonitemasterpieces.com/>



「アンモナイトの逸品」展で出品された  
トロパエム・パウアーバンキ  
(独アルトミュールタール恐竜博物館所蔵)

Copyright: Raimund Albersdörfer und Kristin Erdmann

## メカトロン



盛岡市子ども科学館HP  
<https://kodomokagakukan.com>

展示室に入って最初に目にする展示物が「メカトロン」というロボットです。当館のマスコットキャラクター「こかぼう」をモチーフにしたアポロ・未来（ミライ）・夢来（ムック）の3台です。タッチスイッチにさわると呼んだお客様の所によって行き、ダンスやジャンケンをします。人気の座は不動です。直ぐにはよって来てくれないじれっさも魅力の一つです。3台揃ってダンスや合唱をするグループモードという機能も備わっています。アポロは電子楽器テルミンの演奏も行う事ができます。



こかぼう



次回執筆者は、仙台市科学館 副館長 加藤 博之さんです。

## リニューアル情報のご提供をお願いします

最近（近年）リニューアルした展示、コーナー等がありますか？

もし、リニューアル行いました！という館・園がございましたら、ぜひ全科協ニュースへ情報をご提供ください！

全科協ホームページ（<https://jcsn.jp>）の投稿フォームからご投稿いただけます。

また、併せて特別展等の情報もご提供お待ちしております。（次号は5月6月開催分になります）

こちらと同じく全科協ホームページの投稿フォームからご投稿いただけます。

皆様のご投稿お待ちしております。



全国科学博物館協議会

### 全科協ニュース編集委員

石浜佐栄子（神奈川県立生命の星・地球博物館主任学芸員）  
 筋野 美穂（多摩六都科学館学芸員）  
 平田慎一郎（きしわだ自然資料館学芸員（特命参事））  
 弘田 澄人（川崎市青少年科学館（かわさき宙と緑の科学館）  
 天文担当係長）  
 丸山 啓志（千葉県立中央博物館研究員）  
 望月 貴史（岩手県立博物館専門学芸員）  
 関根 則幸（国立科学博物館学習支援部広報・連携課長）

### 全科協事務局

国立科学博物館  
 学習支援部 広報・連携課  
 （担当：登島・斉藤・清水）  
 TEL 03-5814-9171  
 info@jcsn.jp  
 発行日 2026年3月1日  
 発行 全国科学博物館協議会 ©  
 〒110-8718  
 台東区上野公園7-20 国立科学博物館内  
 印刷 株式会社セイコー社